

碧い風

きらめきの地域デザイン

あおいかぜ

特集

暮らしと民藝



77

2013 March

特集
暮らしと民藝

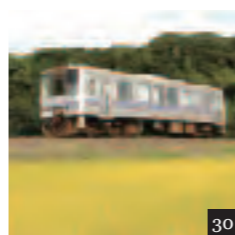
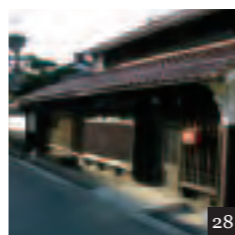
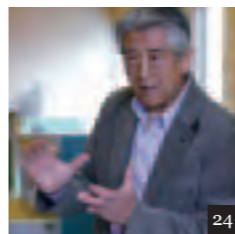
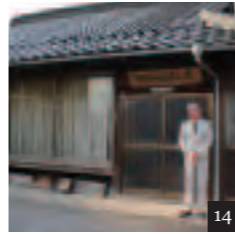
青い海と緑の山々に恵まれた中国地域に、地域づくりの風が吹き始めています。自分たちの大好きなこの街を少しでも良くし、子どもたちにとってしっかりと手渡したい。こんな気持ちで頑張っている人たちがいっぱいいます。「碧い風」は、そんなまちづくり人を結びながら、自分たちのまわりにある魅力を高め、きらめくような中国地域にしていく媒体にしていきたいと思っています。強くはないが、楽しい風。そんな風を、みなさんと一緒に巻き起こしたいと考えています。

きらめきの地域デザイン
碧い風
あおいかぜ

77
2013 March

contents

- 3 健やかな美・民藝の魅力 山陽・山陰を歩く 元広島文教女子大学教授 境邦夫
- 6 バーナード・リーチと日本 山陰・山陽におけるその足跡 東京国立近代美術館主任研究員 工芸室長 諸山正則
- 8 倉敷民藝館とその建築美 公益財団法人金沢文化振興財団鈴木大拙館学芸員 猪谷聡
- 10 吉田璋也の精神を引き継ぐ鳥取民藝美術館 (鳥取市)
- 12 安部榮四郎と出雲和紙 (島根県松江市)
- 14 山まゆ織の伝承を目指す「山まゆの里」づくり (広島市)
- 15 「若者たちの地域づくり」12 学生と地域が熟議・協働して課題を解決 (広島市)
- 16 「地域に生きる企業家群像」77 日本綿布株式会社 社長 川井眞治 (岡山県井原市)
- 20 「企業連携レポート」9 製紙工場の廃棄紙管を活用し、天然素材の油吸着材を独自開発 (山口県岩国市)
- 22 「キラリ・輝く元気企業」50 食生活の変化を敏感に感じ取り、多彩な商品を展開するますやみそ (広島県呉市)
- 24 「夢紡人／ゆめつむぎびと」73 「定年後は田舎暮らし」の夢が地域資源の再生に変わった古野俊彦さん (島根県江津市)
- 27 「ご当地B級グルメ」9 防府みそ焼きマイマイ (山口県防府市)
- 28 「潘ものがたり」12 鹿野藩 (鳥取市)
- 30 「ローカル線探訪」6 美祢線 (山口県山陽小野田市・美祢市長門市)
- 32 「国宝の旅」12 不動院金堂 (広島市)



●表紙写真：湯町窯の大皿・撮影 古川 誠 (島根県出雲市在住)
●目次写真提供：鳥取民藝美術館、西出雲、林田 悟 (岡山市在住)、古川 誠、杉野昭久 (鳥取市在住)、JR美祢線利用促進協議会
●表紙デザイン：久原 大樹 (広島市在住)
*本誌は再生紙を使用しています。

特集

暮らしと民藝

**健やかな美・民藝の魅力
山陽・山陰を歩く**

境邦夫

民藝とは民衆的工芸の略で、大正昭和の民藝運動家、柳宗悦が生み出した言葉である。柳は、ありふれた生活用具として日常誰もが使い、それ故に評価されてこなかった陶器、織物、木工、和紙などの民衆的工芸品に真の工芸美が宿ることを発見、日本全国を回って職人たちの保護育成に努めた。時代の波に消えかかっていた多くの民藝は生き残ったのである。柳が確立した民藝美学とは何か。山陽・山陰地方で今も盛んに作られる民藝を見ながら考えてみる。



壁に飾られた花筵 写真提供：倉敷民藝館

**大原家の協力で
民藝が浸透した岡山県**

岡山県には柳宗悦(一八八九〜一九六一年。東京都出身。東大文学部卒)の民藝運動に大きく協力した一人の人物がいた。倉敷出身の実業家・大原孫三郎である。倉敷紡績社長、中国合同銀行(現中国銀行)頭取などを務め、大原美術館、大原社会問題研究所などを設立した大原は早くから柳の民藝運動に賛同、柳が計画し一九三六(昭和十一年)年に完成した日本民藝館(東京・駒場)の建設費を寄贈したのである。戦後開設された倉敷民藝館(初代館長・外村吉之介)の実現にも大原家の協力があつた。

**美しい民藝に出会い
心を揺さぶられる**

もう四十年前も前だが、地元の中国新聞記者だった私は、山陽、山陰の民藝工房六十カ所を取材し、新聞に長期連載する機会があつた。そのとき受けた大きな感動は今も忘れられない。なぜなら、柳の説に共鳴して仕事の伝統を守り、現在も美しい民藝を作る人たちが、わが郷土にこんなにも大勢いたのかと驚いたからである。

職人たちは早くから柳の指導を受け、民藝とは「民衆的なもの、数多く作られるもの、安価を旨とするもの、健康なもの、簡素なもの、協力的なもの、伝統に立つもの」という柳の教えを体得していった。倉敷民藝館も職人たちを積極的に指導した。作られるのは焼き物、和紙、ガラス器など多彩だが、特色あるものとしては、きつい力仕事から生まれる花筵、和風絨毯といった趣のある緞通、作る人の謙虚な人柄が作品に出た籐細工などがある。



写真撮影：芥川博之(広島市在住)



バリエーション豊かな倉敷ガラス 写真提供:倉敷民藝館

戦後の新作民藝としては倉敷ガラスがある。小谷真三の手吹きによるガラス器である。小谷は十七歳の頃からガラス吹きをはじめ、あちこちの工場で腕を磨いた。長年、クリスマス用の装飾玉を吹いていたが、ある日近くに住む民藝愛好家からガラス器作りを勧められた。苦勞の末やつと安定してできるようになり、今では美しい作品に熱烈なファンがいる。水色の酒瓶やワイングラス、鉛色がかつた緑色の水差し、大鉢や小鉢―どれも優しいフォルムをたたえ、中近東の古代ガラスを見るような美しさである。

鳥取民藝のプロデューサー 吉田璋也

鳥取県では、鳥取市の開業医であつ

安来市の金工、木工・竹工、緋、出雲地方の和紙などだ。

安来市の金工は全国的にも珍しく、鉄屑を使った民藝と呼ばれる。代々、キセル、簪などの銀細工を作っていた金田勝造が河井の指導を受け始めた。代表的なものは鉄製の行燈だ。鉄板をたがねで打ち抜いて松、竹、梅、鯉などの模様を施し、内側から和紙を張って四角い行燈にする。模様は版画のような味わいがある。ろうそく立て、火箸、灰慣らしなども美しい。



愛らしい形のピッチャー 写真提供:出西窯



吉田がデザインした掛け分け皿 写真提供:鳥取民藝美術館

た吉田璋也が起こした新作民藝運動がある。吉田は、柳がその必要性を訴える新作民藝運動の実践を思い立ち、一九三〇(昭和五)年の暮れに故郷鳥取に帰った。すでに民藝の制作は消えかかっていたが、優れた技術を持つ職人たちがいた。農民の日用雑器を作る窯場、木工の挽物師、指物師たち。「彼らの作っているものを現代風にアレンジすれば新しい民藝ができるのでは」。吉田は指導に乗り出した。自転車で作事場を訪れ民藝美論を説いた。自らデザインもした。水瓶、味噌瓶はコーヒータ碗や花瓶になり、和ダンスやランプ台の技術は応接椅子や電気スタンドに生かされた。彼らは鳥取民藝協団を結成した。戦後には鳥取民藝美術館も開設された。ただ、いくら立派なものが増えても、

安来市では野白国雄が作るけやきの和ダンスや姫鏡台も、まさに、これぞ本物の民藝!と思わせる。材料のけやき、漆などの吟味をはじめ工程も完璧を期さないと気が済まないという。簡素なデザイン、自然の漆の渋い艶出しなどたまたなく愛着の湧く作品だ。

焼き物で注目されるのは、出雲市斐川町の出西窯だ。戦後の一九四七(昭和二十二)年、農家の跡継ぎ五人が集まり始めた。素人ばかりだったが、間もなく柳や河井、濱田らの知遇を得、鳥取の吉田、英国の陶工バーナード・リーチらの指導を受けて仕事の方向は定まった。いわゆる繰り返しのなかから生まれる美の追求だ。日本や朝鮮の古作を模して飯茶碗、湯呑み、皿、鉢、酒器、番茶器、コーヒータ碗などを作り、通商産業大臣賞受賞、日本民藝館展入選などを重ねた。その後、若い人たちの入門が相次いで、仕事場には活気があり、創業者の一人、多々納弘光を囲んでの民藝美学や民藝思想に関する勉強会も盛んだった。鳥根県内では一九七四(昭和四十九)年、出雲民藝館が開館した。

作る人の姿勢が 民藝の美につながる

柳は、民衆的な工芸は美しいという。しかし、なぜ美しいのか。そう考えな



新作民藝運動の木工家具 写真提供:鳥取民藝美術館

売れなければ、仕事の発展はない。吉田は鳥取と東京・銀座に「たくみ工芸店」を開店した。こうして吉田はデザインから販売まで世話をする立場をとった。自らを「民藝のプロデューサー」と呼んだ。プロデューサーには①美しいものを取り上げる目②自分でもデザインできる力③制作に多くの協力者を得られる力④繰り返し返して制作させる力、すなわち売りさばく力が求められるとした。

鳥取民藝協団の製品には山陰の風土から生まれた、陰影に富んだ工芸品が多い。机、椅子などの木工から中国地方の手仕事場を巡った私は、ふと気付くことがあった。失礼な言い方かもしれないが、民藝を作る人たちは、生活ぶりがみんな質素で、超俗的で、清貧に甘んじるところがあり、人柄が申し合わせたように謙虚で、地味で、誠実で、金銭的に淡泊な印象を受けたのである。

民藝の健やかな味わいの深さは、作る人たちのそうした生き方そのものから生まれるのだろうか。

「(略)信徒が名号を口癖に何度も唱えるように、彼(陶工)は何度も同じ轆轤の上で同じ形を回しているのだ。そうして同じ模様を描き、同じ釉掛けを繰り返している。美が何であるか、窯芸とは何か。どうして彼にそんなことを知る知恵があるう。だが凡てを知らずとも、彼の手は速やかに動いている。名号はすでに人の声ではなく、仏の声だといわれているが、陶工の手もすでに自然の手だといえるであろう。彼が美を工夫せずとも、自然が美を守ってくれ。彼は何も打ち忘れていないのだ。無心な帰依から信仰が出てくるように、おのずから器には美がわいてくるのだ(略)―柳の論文「雑器の美」の一部である。正直言つて、当初目にしたときはよく理解できなかった。しかし民藝工房をあちこち回り、多くの制作者



木製の電気スタンド 写真提供:鳥取民藝美術館

家具、牛ノ戸窯、因州和紙、弓ヶ浜緋などである。取材で訪れた際、手作りの工芸はこんなに美しいのかと驚いた作品の一つは、鳥取県若桜町で作られる木製の電気スタンド。支柱は一本の丸太を瓢箪状に削って整え、ランプシェードは曲げ木で作った骨組みに和紙が張っており、灯をとると柔らかい光が漏れ、独特のシルエットを作る。一瞬、息をのむ美しさであった。

柳らの指導で 民藝が活気づいた鳥根

鳥根県内にも早くから柳宗悦らの指導を受けた工房が多い。作家的作陶をあえてする袖師窯、英国的焼き物を作る湯町窯、戦後創業した出西窯、柳の仲間でもあった民藝派の陶芸師、河井寛次郎(安来市出身)の郷里でもある

に接するうちこの論文の真意が分かった。柳は、民衆的工芸がなぜ美しいか、その美がなぜ生まれるのか、さらには民藝を作る人たちの、あるべき姿勢をも説いているのである。

民衆的工芸、民藝は郷土の宝物である。民藝は単に生活用具ではなく、私たちの精神、生き方を豊かにする光を放つ。幸いなことに最近、民藝を見直し愛好する人々が増えているといわれる。いつまでも残ってほしいものである。

(敬称略)



写真撮影:古川 誠

profile

境 邦夫(さかい くにお)
1938年旧満州生まれ(広島市出身)。中央大学卒。元中国新聞社文化部長、編集委員、元広島文教女子大学教授(地域文化論、現代文化論など担当)。著書は『山陽山陰の民芸』『広島県文化百選』シリーズ(共著)ほか

暮らしと民藝

バーナード・リーチと日本

山陰・山陽におけるその足跡

諸山正則

日本を愛した陶芸家バーナード・リーチは柳宗悦らと出会い、日本の民窯を度々訪れた。中国地域の民窯には今もその影響が色濃く残っている。



松木研児を指導するリーチ 出典:日本民藝協会発行「民藝」143号(1964年11月)



出西窯、鉛釉のピッチャー(1978年) 写真提供:東京国立近代美術館

東洋と西洋を結んだバーナード・リーチ

英国の陶芸家のバーナード・リーチ(一八七〇〜一九七九年)は、民藝運動を牽引した柳宗悦と、民藝の美論と精神を糧として活躍した陶芸家の濱田庄司や河井寛次郎らと生涯の友となり、自らに東洋と西洋の融合によって来るべき時代の芸術の創造を念じて独創の世界を築き上げた。幼少期を過ごした日本へ再訪を果たした一九〇九(明治四十二年)からの約十年間に、リーチは日常生活の中での芸術を捉える自らの視点を強く抱いた。東洋の中国古陶磁や日本の民窯と、西洋のイギリス中世の陶器やスリッパウェアなどを自らの審美眼で認識し、そして独自の芸術観をもつ

リーチが訪れた中国地域の民窯

その後、幾度も来日を重ね、中国地方の各地を巡遊した。倉敷では実業家の大原孫三郎・總一郎父子や大原美術館初代館長の武内潔真、鳥取では民藝運動の指導者で鳥根の民藝にも気を配った医家の吉田璋也、鳥根では布志名の陶芸家の松木道忠・研児父子、出雲の出西窯、手すき和紙の安部榮四郎らと多くの交情を深めた。

柳や濱田らは、一九三二(昭和六)年に山陰の民藝調査を行い、松江で第一回全国民藝展も開催している。その折に、布志名で代々続く窯元を受け継いでいた松木道忠を新しい工芸を担う陶工として見いだしている。翌年には濱田が松木窯で制作し、松木や近在の袖師窯の尾野敏郎、湯町窯の福間定義らが親身な指導を受けた。なお柳らは、この少し前頃から、湯町や袖師、鳥取の牛ノ戸などの日用の雑器を誠実に手がけている民窯の数々を指導していた。また倉敷では人里離れた地の酒津焼を民窯として指導し、一九三五(昭和十)年二月にはリーチも訪れて不慣れな陶土に戸惑いながらも自作を試みている。英国の古典のガレナ釉に近い伝統の黄

釉とスリッパウェアを駆使用する陶工の松木に関心を抱いたリーチは、土質や意匠が異なるものの、より高温で焼成された松木の陶器に対して、個性を主張し過ぎず確かな人間性をうかがわせるものと感じたという。

一九三四(昭和九)年八月、松江入りした二週間の短期滞在では、宍道湖を眼前にした松木の工房や袖師窯などで終日忙しく働いた。轆轤や京都で整えた石膏型を用いた大鉢や大壺、水注などへスリッパの絵付けなどを行い、また陶工各人の作品への詳細な批評と、水注の把手の付け方や口の作り方などを指導したという。「此の数週間伝統的布志名窯で朝から晩まで松木君らと協働し、仕事の話に、土揉みに、化粧掛けに、窯詰めに、福間、尾野両君の如き慧敏な青年陶工から助力を得て、私はしみじみと次の世代の希望に付ての確かな保証を感じて居る」と述べている。

リーチが訪れ描写した松木宅前の宍道湖風景

松木は、個性が作品の中に自然と湧いて出て仕事の自由さが明らかかなリーチとの協働をもって、「私は最も大きな収穫は、真によいものが出来る

為には、何が最も大切であるか、と云ふことを眼のあたり見せられたこと」であり、その収穫を消化し身に生かしてこそこの教訓と受け止めたという。

ところで一九六一(昭和三十六)年十一月、大原美術館が所蔵する濱田、リーチ、富本憲吉、河井の作品を常設展示する陶器館の開館式のために来日したリーチは、その後で松江を訪れて病床の松木道忠を見舞っている。リーチは、「別れる時、二人共これが最後だということを知っていた。彼が自分の後継である研児から目を離さないでくれと頼むので、そうすると約束した」と述懐している。研児は父・道忠や濱田に師事し、一九五四(昭和二十九)年、リーチが松木窯で滞在制作を行った際に助手を務めて手ずかりの指導を受けた。後には英国セント・アイブスのリーチの工房等で鉛釉の中世陶器を研究するなどして、師らの気風を受け継ぎ、個人作家としての道を開拓した。

出西窯陶工への想い

およそ十八年ぶりとなる一九五三(昭和二十八)年二月に来日したバーナード・リーチは、二年近くにわたる全国各地を東奔西走した。五月、柳や濱田と倉敷へ滞在した後には松江入りし、松木の工房に隣接した丸三陶器工

場や湯町の福間窯などで一カ月間の滞在制作を行った。その際には、「私が原型を轆轤にかけると、びっくりするほど協力的な助手たちがそれを複製してくれ、私も装飾を施し」て大皿や中皿に絞り描きで文様を描き各種の小品を多数制作した。そこにいた十二人の熟練した陶工の中には、リーチの印象に深く残った、出西窯の多々納弘光ら五人がいた。彼らは毎日通い、熱心に指導を受けたという。

出西窯は、鳥根・斐川の青年五人が戦後新たに起こした窯であり、仏教の教えに沿った無自性の理念に影響を受けて協同的な運営とした。ウィリアム・モリスの工芸思想を学び、郷土の先達である河井と、濱田や柳らの懇切な指導を受け、民藝の理念に基づく新たな陶工として期待されていた。信仰に従い、おのずから美しいものが生まれるということを感じて、実用の陶器の生産に努めていた。柳は、一九六一(昭和三十六)年に死去する前に、リーチに出西窯再訪を要請し、個人作家の使命として「自力道」を歩む作家と「他力道」を歩む陶工とが協働して実用のためのより美しいものを生み出す、まさに英国のリーチの工房のような指導を求めたという。

リーチは、一九六四(昭和三十九)年四月の来日時に単身で鳥根を訪れ、

袖師窯や安部榮四郎工房、松木窯、湯町窯を巡り、そして三日間を出西窯で過ごしている。各作品への批評を行うとともに、ピッチャーの把手の付け方をはじめ、ポットとカップ、ピアマグ、エッグペーカーなどの出西窯が今日まで作り続けているデザインの方を具体的に指導した。そしてそこに、「自力」と「他力」が結合した協働の成果を見いだす要所を示した。リーチは、十一年前と変わらず、自分を深く尊敬し信頼して無心に誠実な仕事を成している陶工たちに喜びを覚え、何よりも自身の手ほどきに即応して、松木研児が表した「物が生きていく」仕事とそれに純真に氣付いている出西窯の陶工らの成長に感動したようである。個人作家と職人とが協働して美しいものを生み出すというバーナード・リーチの本願が垣間見えた瞬間ではなかったろうか。

(敬称略)

profile

諸山 正則(もろやま まさのり)
1956年長崎県生まれ。九州芸術工科大学大学院修了。東京国立近代美術館主任研究員、工芸室長。主な企画展覧会として東京国立近代美術館:「河井寛次郎展」(1984年) / 「うつわをみる」展(2000年) / 「柳宗理」展(2006年)。高島屋:「河井寛次郎と棟方志功展」(1999年) / 「バーナード・リーチ展」(2012年)

参考:「工藝」「民藝」(日本民藝協会)、バーナード・リーチ著『日本絵日記』(毎日新聞社刊、1955年)、同『東と西を超えて 自伝的回想』(日本経済新聞社、1982年)他

倉敷民藝館とその建築美

猪谷 聡

日本で二番目の民藝館として誕生した倉敷民藝館は、その建築美で人々を魅了している。



土蔵を改築した倉敷民藝館

「倉敷の「気骨」

「倉敷といえは？」とは、私自身がよく聞かれた質問である。ドラマ・映画のロケ地となることはよく知っていた。個人的には、一九九九（平成十一）年に放映されたドラマを思い出す。ノスタルジックな魅力に溢れた作品を見てからロケ地を巡った。それはそれで良い思い出だが、実際に倉敷を訪れたときに体感したのは、それはまた異なる魅力だったと思う。



倉敷民藝館の展示空間

建築家の手がけた建物を紹介していただいた。そうした建物に関心を抱いたことは覚えている。しかし、倉敷の魅力とは、建築作品が幾つもあるということだけでなく、また古い建物と新しい建物がうまく調和しているということだけにもどまっていなかった。その後、何度か倉敷を訪れるようになってから、それはある種の「気骨」のようなものではないか、と感じるようになった。

白壁と貼瓦が水辺に映える 倉敷民藝館

倉敷を語る上で、ここでは倉敷民藝館を挙げたい。江戸時代後期の土蔵を改装した民藝館は、一九四八（昭和二十三年）年に開館した。白壁と貼瓦の外観が印象的な建物である。観光地で知られる美観地区に位置し、柳の木が並ぶ倉敷川沿いに建つ。川を挟んで、川面に映る民藝館の姿を見ながら正面に立つと、眼は門の奥へと誘われる。

かつて運河であった倉敷川の畔には白壁の土蔵が連なっていたという。江戸期、天領・倉敷は、物資を荷揚げし米を貯蔵する港町として栄えた。土蔵は倉敷の歴史を反映した建物である。

もちろん土蔵は日本各地にあった。土蔵の形式はその土地柄をあらわす。黒壁が関東で好まれたのはその一例である。原孫三郎の援助があつて実現した。また総一郎も民藝運動に関わり、民藝作家と深く交流した。また、倉敷民藝館は、日本民藝館に次いで設立された。民藝館の地方モデルを示し、民藝運動の歴史においても重要な位置に立つ。

民藝館とは、単なる建物ではなくそれ自体が一つの民藝品といわれる。民藝運動のあり方を端的に示すものであり、その地方における民藝の実作を推進する拠点であった。倉敷の民藝運動が発展してきた要因はまさにそこにある。そして、倉敷民藝館はまちづくりのあり方をも強く示してきた。

驚異的に変化し続けている時代の中で、ぶれることなくまちづくりを進めることは決して容易なことではないだろう。にもかかわらず「身近な建物」を生かすという選択肢をいち早く取り、それを続けているところに大きな意義がある。そこに倉敷の「気骨」のようなものを感じてならない。

（敬称略）

profile

猪谷 聡（いのたに・さとし）

1976年石川県金沢市生まれ。大阪大学文学研究科博士後期課程修了（美学専攻）。文学博士。公益財団法人金沢文化振興財団・鈴木大拙館 学芸員。共著に『近代工芸運動とデザイン史』（思文閣出版）、『民芸運動と建築』（淡交社）など。共訳に『国際工芸家会議報告書—陶芸と染織—1952年』（思文閣出版）。



初代館長の外村吉之介

ある。土蔵が建てられたのは江戸期に限ったものではない。明治に入った東京において土蔵造りが選ばれ、黒漆喰壁の二階建土蔵造りの家屋が並んだという。耐火性に優れた土蔵の構造は、物を取めておく倉庫から住宅や店舗宅にまで生かされた。また河岸地において延焼防止のために土蔵が建てられた。都市防災の点からも、土蔵の有用性が認められていたためである。しかしながら、明治後期以降、都市の近代化に伴い、その多くが取り壊されていくこととなった。

倉敷に建つ土蔵の壁に貼られた瓦の意匠は興味深い。漆喰の亀裂や剥落を防ぐ工夫から「なまこ壁」は生じた。倉敷はとりわけその美しさで知られる。通常、瓦は建物の腰の部分だけに施されるが、倉敷では建物の隅角部分にも貼られる。けらば（切妻屋根の妻側）にも瓦が施される。倉敷民藝館の壁は

底目地貼り。瓦の継目の目地を食い違い（馬乗型）とし、目地底が凹められている。

橋を渡ってから川畔を伝って門をくぐる。三方を土蔵に囲まれた石畳に、独特の風情が感じられる。土蔵群はコの字型でつながっており、一度館内に入れば、ぐるっと回って観覧できる。

所蔵品は初代館長・外村吉之介が収集した作品が多くを占める。国内外の多様な民藝品が並ぶ中、地元倉敷のガラスや織物も見どころ。また館内の展示棚、展示ケースも注目すべき点で、陳列はその風情にかなうよう工夫されている。

一階座敷の床の間周辺は、洪く落ち着いた部屋になっており、半分切り取られたような形の囲炉裏が特徴的である。畳に腰掛けて館内を見渡すと、時間が緩やかに流れゆくように思われる。

「町並み保存への高い意識

土蔵は倉敷という土地柄を映し出し、人々にとって「身近な建物」であった。土蔵を生かして民藝館が設立されたことは、「身近な建物」の保存につながっている。外観をそのままに土蔵から民藝の保管展示施設へと改装したことは、収蔵に適したその構造の特徴を生かしたものだといえる。しかし、土蔵の保存

は容易ではない。消防法の関係から改築を要することもあり、また土蔵の建築は鉄筋より費用がかさむようにさえなった。一九七二（昭和四十七）年に民藝館は改築され、平面上二列に並んでいた土蔵群はコの字に一続きとなっている。「身近な建物」の保存は、さらに、町並みの保存につながる。国レベルで町並みの保存が定められたのは、一九七五（昭和五十）年の伝統的建造物群保存地区の制度発足においてである。それ以前から、外村を中心に町並みの保存が進められてきたことは、建物のみの保存にとどまっていなかったことを明らかにしている。民藝館に続き、倉敷考古館が一九五〇（昭和二十五）年に土蔵を改装することによって開館するに至った。

地元のまちづくりに大きく貢献してきたのは大原家である。倉敷紡績事業を明治から展開した煉瓦造りの大工場は、倉敷において代表的な建物であった。またその大工場を再生した倉敷アイビースクエアは倉敷のシンボルともいえる。大原家は、大原美術館の設立をはじめ多くの文化事業を展開したが、民藝運動の発展においても重要な役割を果たしてきた。

民藝運動の念願であった日本民藝館設立は、一九三六（昭和十一年）年、大

暮らしと民藝

吉田璋也の精神を引き継ぐ 鳥取民藝美術館

《鳥取市》

多彩な民藝が展示され、人気を集める鳥取民藝美術館。創設者の吉田璋也が起こした新作民藝運動を後世につなげるべく、新たなデザインを開発するなど意欲的な取り組みが始まっている。



さまざまな様式の家具が集まる

現代生活に 民藝を取り入れる

吉田璋也は一八九八（明治三十一年）、鳥取市立川に父・久治、母・伴代の子として生まれた。医師を志し、新潟医学専門学校（現在の新潟大学医学部）に入学すると、後に唯一無二の親友となる式場隆三郎とともに、柳宗悦らの「白樺派」に影響を受け、自然と民藝にもめり込むこととなった。一九二〇（大正九）年の初夏、千葉県我孫子に住む柳を友人とともに訪ね、生涯師事することになる。

鳥取に帰った吉田は、医業のかたわら、民藝運動を進めていく。ただし、全国各地の民藝を見て回り、その美の基準を説いた柳らに対し、吉田が行ってきたのは民藝を生活の中に取り入れるという、現代的な側面を持っていた。

一九三一（昭和六）年当時、窯業を続けるかどうかを悩んでいた牛ノ戸窯（うしのと）で、鉄筋コンクリート造の一階建ての上の姿になった。外観は漆喰仕上げだが、内部は木の素材を生かした板張りの空間で、扉を開ければその建築細部や家具に心を奪われる。

暮らしの中で美を体験する

鳥取駅近くに建つ現在の鳥取民藝美術館は、一九五七（昭和三十二年）に改築したものである。基本設計は吉田が行い、工事段階においても道路を隔てた医院から毎日現場に向き、細部にわたって指示をしたという。

和風麻葉紋や朝鮮風「正崩し」の組子障子、ヨーロッパのエッセンスが加えられた電気スタンドや中国やイギリス風の椅子などが集まる空間は異なる様式を集めながら不思議と調和している。柳宗悦の言葉を借りれば、これは「混成」ではなく「総合」。個性を尊重し、空間を構成する手法は、多様性を重視する現代の考え方と通じるものがある。

建築や家具に民藝の粋が感じられる同美術館は、二〇二二（平成二十四）年、国登録有形文化財となった。

一九三二（昭和七）年に開業したたくみ工芸店の隣に建つのは「たくみ割烹店」である。民藝の器に、その地域の郷土料理を盛り付け、お客さまに食



吉田がデザインした「ににぐりネクタイ」

を訪れ、新作民藝の試作に取り組みように説得した。その時に作られたのが、緑と黒の二色掛け分け皿である。二種類の釉を使用する掛け分け皿は、本来、黒と黄土の色使いであったが、吉田はそれを黒と緑にアレンジした。

その頃牛ノ戸窯を訪れた柳は、新作民藝を見て称賛した。そのことが吉田の自信につながっていき、新作民藝運動をさらに進めていく。

一九三二（昭和七）年から制作した「ににぐりネクタイ」「ににぐり」とは、絹糸にならないまゆを紡いだ糸で、売物にはならず、農家では家庭用の生活用品に使用していた。吉田は、柳から

次の八〇年に向かって

二〇二二年は、たくみ工芸店が八〇周年、たくみ割烹店が五〇周年を迎えるという記念すべき年であった。九月には、ヘルシンキで開催されたプロダクトデザインの博覧会「ワールドデザインキャピタル」の日本ブースで吉田璋也の展覧会が行われた。その機会に新しくデザインした民藝が評判を得るなど、大きな成功を収めた。次の八〇年に向け、鳥取民藝美術館では今までの蓄積を生かした新しいデザインを開発するなど、意欲的な取り組みが行われている。変わり行く時代の中でも、常に現代的な感覚を失わなかった吉田璋也。その精神は、これからの鳥取の民藝に引き継がれていくだろう。（敬称略）



創設者の吉田璋也

贈られた英国製の手織りのウールのネクタイから着想し、「ににぐり」を使って新しいネクタイをデザインした。このネクタイは高い人気を集め、模倣品が出回ったという。また、商品化することは、同時に、農家の女性に内職となる仕事を作り出すことでもあった。

デザイナーの精神と重なる部分がある。一九三八（昭和十三年）、吉田は軍医として応召し、中国北方に従軍した。一年以上軍医として活動し、現地の村々を訪れる中で、日本の民藝と同じように、中国の人々の暮らしの中に民藝があることに気付く。国は違えども、その文化は守るべきものだと感じた吉田は、中国で新作民藝運動を起こす。中国の工芸を研究、指導し、北京で「華北生活工芸店」を開店した。

敗戦後、京都に引き揚げた吉田は一九四七（昭和二十二）年に鳥取に帰り、民藝運動を再開する。二年後の一九四九（昭和二十四）年は大きな節目の年でもあった。自らが収集した民藝を展示する鳥取民藝美術館を創設し、職人の集団となる鳥取民藝協団も設立、さらに鳥取民藝協会も再発足させた。

美術館設立の目的は、市民に民藝の美しさを伝えることであったが、もう一つ、職人たちにその手本を見せることも重要な目的であった。実際にものを見、触れ、自らの作品に反映すること。美術館は市民教育、職人教育の場であり、現在もその精神は引き継がれている。



鳥取民藝美術館(左)とたくみ工芸店(右)

暮らしと民藝

安部榮四郎と出雲和紙

《島根県松江市》

手すき和紙の人間国宝として広く知られる安部榮四郎は、柳らとの出会いを通じて、和紙への思いを強くし、創作活動を広げていった。

「これが日本の紙だ」と
柳宗悦が称賛

安部榮四郎は二九〇二（明治三十五）年、島根県八束郡岩坂村別所（現松



紙をすく安部榮四郎 写真提供:安部榮四郎記念館

江市八雲町東岩坂別所）に生まれた。安部は、幼い頃から家業の紙すきを手伝い、その技を学んできた。村では古くから紙すきが行われてきたが、決して名高い産地であったわけではなく、そ

の修業は自発的な研究ともいえるものであった。二十一歳の時、安部は島根県工業試験場紙業部に入り、さまざまな紙すき方法を試みながらその技術を磨き、県下の職人たちを巡業して技術指導を始めるようになった。

島根の民藝運動を語る上で、欠かせないのは太田直行の存在である。松江商工会議所の理事をしていた太田は、河井寛次郎と松江中学校以来の親友であり、河井を通じて柳宗悦や濱田庄司らと知り合い、県下の民藝運動を推進してきた。制作指導や販路開拓、県内外での展覧会に奔走し、後に、袖師窯の尾野敏郎、布志名窯の船木道忠、工藝家の金津滋を育て、島根民藝協

会の礎を築いた人物でもある。一九三一（昭和六）年、松江商工会議所で太田は柳らを招き「正しき工芸の展覧」を開催した。

その展覧会を訪れた柳は、安部の和紙を見て「これが日本の紙だ」と称賛した。昭和初期、手仕事で機械に代わられていく中で、手すきの和紙がどうやったら後世に残るのかと、深く悩んでいた安部は、柳との出会いによって、和紙本来の姿を教えられ、生涯紙すき職人として生きる決意をする。

民藝との出会いで
創作の幅を広げる

出雲和紙の歴史は古い。約一二〇〇年前の出雲の紙が奈良の正倉院宝物の中に残っており、一九六〇（昭和三十五年）から三年かけてその紙の研究が行われた際には、唯一の紙すき職人として安部も調査に加わった。はるか昔にすかれた雁皮紙が、虫食いもなく、生き生きとして残っているのを見て、「いいものは最後まで残る」と安部はよく語っていたという。

一番盛んに紙がすかれたのは江戸時代である。初代の松江藩主松平直政が、越前の国から紙すき職人を招き、紙すき場「御紙屋」を建て育成を図った。八雲村（現松江市八雲町）でもその影歴史と伝統を持つ地域の資産である。信一郎氏らは後継者の養成や子どもたちへの教育、科学的な研究などにも力を入れ、その文化の継承に励んでいる。

出雲和紙だけではなく、中国地方には数々の和紙の産地がある。代表的なものとして倉敷の備中和紙、島根の斐伊川和紙や石州和紙、鳥取の因州和紙などが挙げられる。とりわけその現代的活用が注目されているのは、因州和紙だ。一九六八（昭和四十三）年に協業組合を設立し、機械すきの和紙を大量に生産しており、内装用のクロスや照明などのインテリアにも利用されている。暮らしと民藝。その中でも人々の暮らしに最も身近に存在していたのは、紙といえるかもしれない。なじみ深いその感触を忘れることがないよう、いつまでも存在してほしいものである。（敬称略）

棟方志功がその場で描いたふすま絵、八雲村の紙すきの様子を基にした芹沢銈介の型絵染などが飾られ、柳の民藝運動に共感した作家たちの痕跡が多く残っている。分野の違うそれぞれの工人たちが、互いの技術に刺激を受けながら、それをおのおのの創作へと生かしていった様子が目に浮かぶようである。また、一九八三（昭和五十八）年、安部は生涯かけて収集した貴重な和紙の資料や民藝品の数々を保存、公開するために、八雲村に「安部榮四郎記念館」を設立した。

手間と時間を要する
手すき和紙

手すき和紙は、昭和初期まで盛んであったが、その後は機械製紙に押され、現在、その工房は岩坂地区にはわずかに二軒しか残っていない。

和紙を暮らしに
取り入れるには

時代は手紙からメールへ、コミュニケーション手段は移り変わり、紙をめぐる環境は大きく変化した。しかし、和紙は

響を受け、江戸時代中頃より紙すきが行われるようになり、岩坂地区でも多い時には三十軒ほどが紙すきをしていたという。

一九三一年に柳らに出会い、民藝運動に飛び込んでいった安部は創作活動の幅を広げていく。伝統的な雁皮紙、楮紙、三椏紙のほか、和紙の持ち味を生かして染めた和染紙、水の美しい動きを生かして繊維をすき込んだ模様和紙など、彩り豊かで美しい和紙を作り出した。それらは、レターセットや本の装丁などの小物、ふすま用としても提案された。一九三五（昭和十）年には、バーナード・リーチの支援もあって、初めてロンドンに紙を輸出し、その後次第に欧米各国で認められ、年間一千万円以上を輸出していた時期もあった。大きな評価を受けていた安部であったが、その技に溺れることなく、草深い谷あいの村で、黙々と伝統的な技法に身を捧げてきた。そして一九六八（昭和四十二年）、安部は雁皮紙をすく技術が高く評価され、重要無形文化財、いわゆる人間国宝に認定された。

今も岩坂に残る「出雲民藝紙館」を訪れると、民藝運動の仲間とともに過ごした日々を感じ取ることができる。沖縄の陶芸やガラス、鳥取の木工家具など各地の民藝の品々が所狭しと並ぶ中、



色とりどりの出雲和紙



榮四郎の技術を受け継いだ信一郎氏



安部榮四郎記念館の外観 写真提供:松江観光協会

山まゆ織の伝承を目指す

「山まゆの里」づくり 〈広島市〉

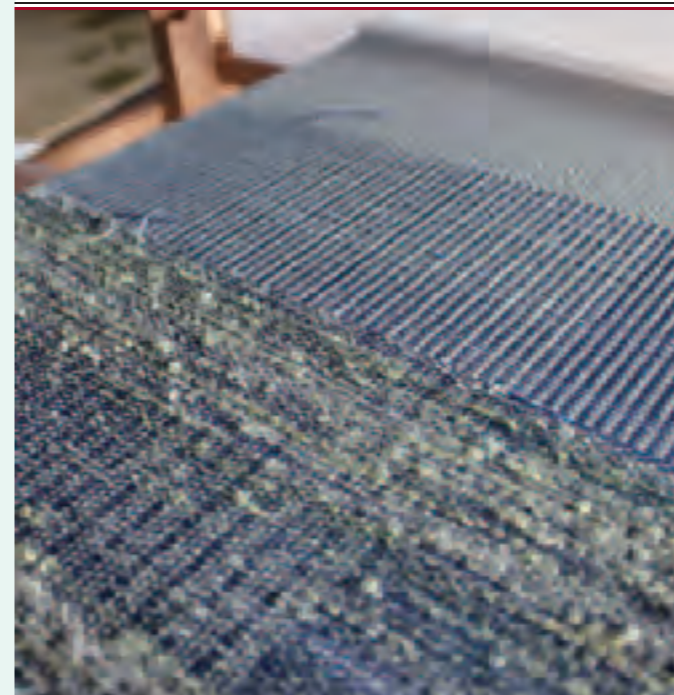
かつて柳宗悦が著書『手仕事の日本』で紹介、絶賛した広島市民藝品に山まゆ織がある。その復活・伝承に取り組み「可部山まゆ同好会」の活動を紹介します。

もうつむぎで

江戸中期から特産品に

「山まゆ織」の産地は、広島市北部の山間地域、出雲・石見方面への流通の

分岐点として栄えた安佐北区可部町だ。谷沿いの集落は耕地が狭く、まきや薪炭とともに、里山で採れる山まゆの織物が重要な収入源であった。山まゆは、天蚕とも呼ばれるヤママユガのまゆで、瀬戸内地方に多いクスギ、ナラ、アラカシなどの葉裏に作られる。薄緑色のまゆから採れる



横糸に山まゆ糸を使った織物。会員は「山まゆの里」で糸を紡ぎ、手織り作品を作っている



葉裏に作られる山まゆ

糸は約六〇メートルとカイコの半分程度だが、薄黄緑色で光沢があり、太く丈夫。空洞が多いため、織物にするとき夏涼しく冬暖か、着心地が軽いのが特徴だ。

可部の山まゆ織については、江戸中期の一七三九（元文四）年「広島藩が製法を幕府に報告した」との記録がある。縦糸、横糸とも山まゆ糸を使う「もうつむぎ」で知られ、手紡ぎの絹の抑えた光沢や肌触りの良さとともに、丈夫で刀の刃を通しにくいとされて、参勤交代の土産品としても人気があったという。

最盛期は明治から大正初期で、旧可部町役場保存の資料によると、一九二二（大正元）年の六万五千九百八反を頂点に、一九二二（大正十）年で約二万二千七二反、一九二七（昭和二）年には約一五二〇反と急減し、人絹など新しい織物に押されて姿を消していった。

会員が山まゆ生産から手掛ける

可部の人たちが、一度は消えた山まゆ織を復活させようと動き出したのが一九九八（平成十）年だった。国道五十四号可部バイパスの新設によって寂れる旧国道周辺地域の活性化策として、地元商工会員や学識経験者が

熟議の末、山まゆ織の復活・伝承に取り組む「可部山まゆ同好会」を発足させた。

山まゆの調達に、天蚕の幼虫を求めて周辺の野山を探し回り、わずか十七匹の採集から始めて十年余り。今では会員が自宅の庭で育てるほか、小学校で地域文化の体験学習として育ててもらうなどの生産体制をつくった。

山まゆの量はまだ少ないが、山まゆ織についても、地域内の民家「山まゆの里」で講習会を開き、会員は自分で採ったまゆから糸を紡ぎ、布を織りながら研究に取り組んでいる。二年に一度開催する作品展の入場者が増えていることもあり、販売できるオリジナル作品を作って知名度を上げることが今の目標だ。

そのために山まゆの量産体制を確立したいと小田貢会長は話す。「庭のない会員がえさを確保するための植林場をつくるほか、定年退職等で戻った元農家の方に、山を手入れして自然界で飼ってもらうことも考えています」。

地元の顔見知り同士が関わりを深め、知恵や力を出し合いながら進めてきた活動を、これからも継承し、この地で山まゆ織りが復活することを期待したい。

（文・斎藤さつき・広島市在住）

学生と地域が熟議・協働して課題を解決

〈広島市〉



地域の課題を議論しプロジェクトを提案

広島修道大学は広島市の郊外に位置し、5学部9学科を有する文科系私立大学である。常に地域の先頭に立ち、存在感のある大学を目指し、「地域」と「大学」の連携に力を注いできた。

地域が抱える諸課題の解決や地域連携をさらに深めることを目的に、同大学では2010（平成22）年度より「地域つながるプロジェクト」を企画。この事業は計画立案から、実行、まとめ、報告に至るまで、学生が主役で行うことが特色で、学生が地域づくりに参加する意識も高まるなど、一定の成果は得られたという。

「報告会では、内容も充実し、課題と格闘した学生たちの確かな自信を感じました。その一方で、取り組みによる充実度の違いや学生主体の目線で地域が求めるものとズレが生じるなど、課題も残す結果となりました」と語る学術交流センター長の山川尚美さん。

これらの課題を受け、「地域」から「学生」に問題提起をして議論を交わし、共に地域課題解決を目指す『修大熟議プロジェクト2030』が立ち上げられた。熟議とは



修大熟議プロジェクト2030で学生が発表

「熟慮」と「議論」、この二つの言葉を掛け合わせたもの。熟議は平成22年度から文部科学省の提唱により、大学と地域の共生・協働関係を発展させるネットワーク構築の取り組みとしてスタート。同大学は中国・四国の私立大学として唯一の参加校だ。地域と学生が「熟慮」と「議論」を交わし、実践していくことで、現実的な課題の解決や政策形成を具体化する同大学の熟議プロジェクトは、文部科学省の支援を受けながらも、大学が独自に発展させた地域連携の足掛かりとして期待される。

昨年の6月には地域住民と学生、教職員が地域課題についての議論を開始。議論の方向性に基づき、7月から各プロジェクトを展開し、12月8日には、その集大成となる報告会が開催された。報告会は学生が熟議を通して、「どのくらい熟成したか？」を披露する場となった。8分間という限られた時間を使って取り組みを報告し、その後講評も述べられた。会場では、2030年の広島に対する想いを来場者や学生がメッセージとして残すモニュメントのほか、プロジェクトの詳細パネルも掲示された。

当日の審査で最優秀賞と評価されたのは、「法学部生が考える地域発展のためのスポーツ・ビジネスの課題と対応」で、広島市が掲げる新しい『スポーツ王国広島』創造による地域づくりは、企業や団体による活動抜きでは実現できないと考え、法学部生の視点で法律的な課題解決の手法を提言したもの。他に注目されたのは、まだ知られていない地域の魅力や情報を新しい観光資源として利用する「コンテンツに隠れた広島再発見の旅っ!」、ICT※というネットワーク技術を今年開催される「ひろしま菓子博」で活用する例を提案した「ICTを活用した地域社会を考えるプロジェクト」、持続可能な地域づくりを支援する施設としての公民館へ地域住民と大学生が共にどうアプローチしていくのか、その解決策を提言した「未来へつなぐ公民館HAPPYプロジェクト」などであった。「どのプロジェクトも重要な地域課題を取り上げ、問題解決の視点も身近で、さらなる継続を期待したい」とゲストに招かれたアマタ株式会社代表の藤原明文さんとソーシャル・プランニング・アンド・リサーチ代表の山下永子さんは、実際に地域活性化事業を数多く担う立場でエールを送る。「学生の視点と若い力で、今後も『地域』と『大学』のつながりを持続させたい」と山川さんは話す。「今回のプロジェクトを一過性のもので終わらせない」と、参加した学生たちも口をそろえる。（文：平光 稔）

※ICT…Information and Communication Technologyの略。情報通信技術



日本のデニムの価値を世界に発信する

日本綿布株式会社 社長 川井 眞治 〈岡山市井原市〉

織物業の革新を決意

予想外の光景だった。ヨーロッパ繊維業の一大産地といわれていた北イタリアのトスカーナ州プラートを訪れたとき、その街はひっそりとしていた。そこで何百軒と連なっていると思っていた機屋^{はたや}の大半は廃業していたのだ。

話を聞けば、コストの安い北アフリカのチュニジアや、ブルガリアなどの東ヨーロッパが織物産地として台頭し、分業制だったトスカーナの機屋は連鎖的に閉鎖に追い込まれたという。そうして、街に残ったのはたったの五社のみであった。「当時の井原も、各工程の工場が集まって産地を形成する分業制でした。しかし、そのときトスカーナで視察した一社では、染色・製織・整理加工^{※1}まで行っていました。他の四社も同じく一貫生産。早晩われわれも必ずそうなるなど実感しました」

社長に就任する一年前にヨーロッパで出会った衝撃的な光景を、企業家はそう回想した。世界屈指のクオリティと評されるデニム生地で、国内外の高級アパレルブランドを顧客に持つ日本綿布の川井眞治社長（61歳）である。一九九六（平成八）年に社長に就任した。すらつとした長身に明るい笑顔、自社のデニムジャケットを羽織る姿が印象的だ。

文：城市 奈那 写真：林田 悟（岡山市在住）

伝統的な織物産地・井原

日本綿布は一九一七（大正六）年に岡山市井原市で創業した。井原は、江戸時代の宿駅、矢掛宿と神辺宿^{かんなま}を結ぶ道のちょうど中間地点にあたる。本社の前を通る細い道路はかつての山陽道で、享保期から幕末にかけて参勤交代で多くの大名が通り、その周辺は宿地としてにぎわいを見せたという。

温暖な気候と豊富な水に恵まれた井原では、約三四〇年前から綿花が栽培され、手袖^{てしほ}と手織により衣服が作られていたが、明治時代から、本格的に織物業に移行する。早い時期に工業化が進んだことで、縦じまを特徴とした良質で丈夫な木綿布である小倉織を生産し、制服などを作った。第二次世界大戦まで「備中小倉」は世界中に送られた。

戦後はネルなどの綿織物を中心に生産が進んだ。一九七〇年代、井原はTR^{※2}と呼ばれる合織織物と綿織物の産地だった。TRは南アフリカ共和国やイラン、イラクなどに輸出され、綿織物は国内向けに販売された。そして、デニムの生産もすでに始まっていた。

産地の衰退危機を実感し、一貫生産化に踏み切る

川井社長は一九五一（昭和二十六）

年に井原市で生まれた。法政大学に進学していた一九七〇年代、日本経済は飛躍的な成長を遂げており、就職間近の学生は企業に引張りだこであった。「大学教授と食事に行き、ゼミの先輩と知り合うと、その場で入社が決まる。そんな時代でした」

都市銀行に内定したものの、両親や当時の社長の強い勧めもあり、卒業後に井原に帰る決意をする。曾祖父が創業した日本綿布への思いは常に心にあったのだらう。

「教授からは五年か十年、他の企業で働いた方がいいと言われました。でも今は、あのとき井原に戻ってきてよかったと本当に思いますね」

実際、それは時宜にかなった決断といえるだろう。地元に戻った川井社長は、徐々に産地の衰退を肌で感じるようになってきた。川井社長が入社した一九七四（昭和四十九）年当時、備中織物構造改善工業組合に加盟していたのは三三〇社。産地の縮小に伴い、加盟社数も減少していくことになるが、ある年に半数以上減るという劇的な変化があった。一九八五（昭和六十）年、「プラザ合意」の年である。先進五カ国で為替レートのドル安の推進が合意された後、急激な円高が輸出企業を襲った。その結果、ここ井原

profile

川井 眞治（かわいしんじ）

1951年岡山県井原市生まれ。1974年に大学を卒業後、日本綿布に入社。1996年に社長に就任。日本綿布は1917年に合資会社として創業。1920年に株式会社に組織変更。資本金は2,000万円、従業員数は60名、売上高は7億円である。



日本綿布の心臓部といえるシャトル織機

でも合繊織物を生産していた企業は海外輸出を維持できなくなり、一気に廃業に追い込まれた。

「われわれは綿織物の国内販売が中心でしたが、合繊織物を輸出する会社はそのときにほとんどなくなりました。今でも覚えているのは、その年の忘年会のこと。隣に座った大先輩の社長が私に「つぶやくのです。『川井君の会社には来週の月曜日になったらまた仕事が来るわなあ。うちはもう半年も仕事が来ておらん』と。そのくらい、当時の円高は死活問題でした」

井原が危機的状況に追い込まれるなか、川井社長はJETROのヨーロッパ研修ツアーに参加する。桐生、泉州、西脇など日本を代表する織物産地の後継者とともに、一カ月スイス・イタリア・フランス・ドイツなどを回った。その研修で見たのが、トスカーナでの光景だ。

一貫生産の必要性を痛感した川井社長は、帰国後すぐに設備投資を進める。幸いにも、廃業した企業の中古機械が東南アジアに流れる前に、入手することができたのだ。それからは、整理加工のサンフォライズ加工機、インディゴ染色用のロープ染色機など設備の新設を繰り返した。現在の組合加盟数は十五社。それでも、三三〇社あった頃の七割の生産量を保っている。

ないほどの微妙な色味や色ムラの変化、そしてセルビッチのデザインなど多彩なバリエーションがある。

「これだけのシャトル織機があるのは、国内でも日本綿布だけだと思います」

シャトル織機を使ったデニム生地の高さが、顧客が求めるオンリーワン商品の実現につながっていく。日本綿布は、周回遅れのランナーだったからこそ、商品の高付加価値化という新しい道を切り開くことができたのだ。

メイドインジャパンの品質を世界に発信したい

日本綿布のデニム生地は、海外でも高く高い評価を得た。同じ岡山県を拠点とするアパレル企業が新設したロサンゼルス工場を訪れた際、現地の人にデニムを見てもらったところ、



3000本の糸をビームに巻き、縦糸を準備

即座に反応が返ってきた。その後、ニューヨークとロサンゼルスに展示会に数回参加し、顧客ができたところで出展を取りやめた。現在はラルフローレンやJ・C・R・E・Wなど限られたブランドとのみ取引を行っている。ヨーロッパ最大の生地見本市ブルミエール・ヴィ

周回遅れのデニム参入が功を奏す

日本綿布が本格的にデニム生産に参入したのは、意外に遅く、一九八五年頃である。それまでは大阪の商社と組み、ギンガムチェックなどの綿織物の生地を卸していた。新しい活路を見いだすべく、東京に進出しようとしていたとき、大時代時代の知り合いからデニムの話を聞いたのがきっかけだった。

「東京に進学し、人脈をつくれたことが幸いしたのかもしれない。アパレルブランドで働く友人から、近頃は業界でもデニム生地を多く使っているという話を聞き、『川井君もやってみたら』と勧められました。しかし、デニムは当時すでに高速織機で大量生産されていました。日本綿布にあったのは旧式のシャトル織機のみ。これでは勝ち目がなかなと思っていたところ、友人たちは『そんなことはないよ』と言うのです。そこで初めてシャトル織機の価値を知りました」

シャトル織機の価値とは何か。川井社長に尋ねると「ポイントはデニムの『耳』ですよ」と答えた。立ち上がって応接間へ向かい、一本のジーンズを持って戻ってくると、目の前でその秘密を教えてくださいました。

ジーンズの裾を折り返すと、腿の外側ジヨンにも参加しているが、これも顧客と安定的な関係を築けば、参加を終える予定である。ビジョンを共有できる相手だけに絞ることで、日本綿布のブランド力を保っていくのだ。

「アメリカでも日本でも決まったお客さまを何度も訪問します。そうすると、彼らはシーズンごとに新しい企画を立てるときにわれわれを招いてくれるようになります。それは本当にありがたいことですし、それが日本綿布の営業ともいえますね」

日本企業が海外のバイヤーと直接コミュニケーションをとるには語学力が不可欠だ。そのことを川井社長に尋ねると、「中学校で習う英語でも十分通じますよ」とニコリ笑った。

「それより重要なのは商社の存在です。海外では未払いなどの問題が時々起こります。世界の情報をつかみ、相手会社の良しあしを判断できる商社と仕事をすることは絶対に必要ですね」

現在、海外比率は五〇%と徐々に高まっているが、川井社長の中で国内顧客への思いは変わらない。むしろ、強まっているともいえる。「日本で売られている衣服の九七%が中国産という現状では、国内向け生産は落ち込まざるを得ないでしょう。一方で、コム・デ・ギャルソンのように、日本で作

にあたる部分に縫い目があり、きれいに整えられた生地の両端が見える。数ミリほどの白地部分に色付き糸のステッチが施されている。この部分こそが、セルビッチと呼ばれるデニムの「耳」である。

高速織機を用いた量産品には、セルビッチはない。旧式の織機で作る幅狭の生地のみのできるのだ。だからこそ、ヴィンテージジーンズに憧れを持つ愛好家たちはセルビッチを見てうなり、丹念に作り込まれたジーンズは人気なのである。

実際に、日本綿布のデニム生地を使った商品は数万円台の高級ジーンズとして売り出されているが、セルビッチだけがその理由ではない。昔ながらの草木染めや藍染め、「備中小倉」に端を発する高い燃糸技術や織布技術を生かしながら、一つ一つの生地を丹精込めて作り上げることで、独自の風合いや表情を出せるのである。二〇一〇(平成二十二年)には、さまざまな色相を持つ世界初のグラデーシオン・デニムの開発で、第一八回中国地域ニュービジネス大賞を受賞した。

川井社長に案内されて、製織工場に入ると、けたたましい音が鳴り響いていた。一五〇台近くのシャトル織機がずらりと並び、稼働していた。機械の間を縫うように歩いていると、それぞれが織る生地が異なることに気付く。生地幅だけではない、柄や色、一見違いが分から

ることにこだわらるブランドもあります。日本で生地を作り、デザインし、縫製した彼らの服を世界中で売ることが理想でもあります。糸を紡ぐ、染める、織るといふすべての工程において、日本はやはり世界一。価値のある商品を作れることがメイドインジャパンの強みだと思います」

日本綿布の社は近代化産業遺産にも選ばれたレトロな木造建築である。「この建物を建て替えたならもう依頼しない」と冗談半分で言う人もいるくらい、味わい深い魅力で溢れている。空間に残っているのは、井原の織物業を支えてきた企業のずつりとした時間の重みだ。日本の技術に太鼓判を押す川井社長の自信は、先人から受け継いできた伝統技術の蓄積に裏付けられているのだろう。



2007(平成19)年度に経済産業省の近代化産業遺産に認定された本社社屋

製紙工場の廃棄紙管を活用し、天然素材の油吸着材を独自開発

《山口県岩国市》

製紙工場では紙の製造工程で紙管が大量に使用されている。その使用済み紙管の有効活用に向け、村上商事は紙管が有する撥水力と油吸着力に着目し、油吸着材を独自に開発。高度なシート成型技術を持った金星製紙などと連携し、廃材利用の環境配慮型製品として販売を「展開」している。



カット装置にかけられた油吸着材

大量廃棄されていた紙管の有効活用に乗出す

村上商事株式会社が油吸着材の研究・開発に着手したのは、二〇〇〇（平成十二）年のことだった。「地元の製紙工場から、使用済み紙管の収集・運搬・処理の業務委託を打診されました。それが紙管の有効活用を考えらるきっかけとなりました」と、村上雅典社長は振り返る。

紙管とは、製紙工程において紙を巻き取る際に使われている長さ五十センチから二メートルの芯材である。わずかな傷や異物の付着で紙の均一な巻き取りに支障が生じるため、再使用されることはほとんどない。また、紙管は何層も重ねて強固につくられていることから加工しにくく、大半が再資源化されずに廃棄されていた。地元の製紙工場でも月に何十トンもの紙管が廃棄処理されていたという。

社員の偶発の発見から油吸着材の開発を着想

最初に開発したのは、紙管を細かく破碎したセルロース・ファイバーである。道路の法面などの緑化に草花の種とともに吹きつける緑化養成分剤「MNFファイバー」として商品化し、販売した。だが、市場が限られていたことから、引き続き製品開発を進めた結果、油吸着材の製

品化にたどり着いたのだ。「偶然、社員が紙管のセルロース・ファイバーが油を吸うことに気付いたのです」と、村上社長。「紙管には、何層も重ねた紙を固めるために接着剤が使われています。接着剤は水をはじく撥水性を多少持っているのを油を吸うのではないかと思いましたが、さらに撥水加工を施せば、油の吸着材になる。そう確信しました」

油吸着材は、海運業界や石油精製業界で事故などによって流出した油や定期修理の際の油の回収に使用されているのははじめ、印刷業界ではインクの洗浄に常用されている。また、機械周りの飛散油対策、工場内での通路や飲食店の厨房等での靴裏の油除去に使われるな

成型技術を持つ企業と連携し事業化を実現

ど、その用途は広い。それらで使われている油吸着材は化学繊維製が主流だが、油の吸着速度や吸着保持力には課題も少なくなかった。紙管を原料にした天然素材の油吸着材に可能性を見いだした村上社長は、本格的な製品開発を開始した。

だが、製品化には時間を要した。紙管を破碎したセルロース・ファイバーを成型する十分な技術を持ち合わせていなかったからだ。独自に成型機を設計・設置して油吸着材の試作を進めたが、連続生産ができないバッチ方式の装置だったため、コストに見合わなかった。そこで成型技術を持ったメーカーを探し出した結果、高知市で不織布の製造や和紙関連商品の加工販売などを行っている金星製紙株式会社と出会い、同社の高



ロールタイプの油吸着材 写真提供:村上商事株式会社



マットタイプの油吸着材 写真提供:村上商事株式会社

知市で不織布の製造や和紙関連商品の加工販売などを行っている金星製紙株式会社と出会い、同社の高

吸着速度と保持率で高い性能

「油吸太郎」は多用途に使えるため、マットタイプ、ロールタイプ、ファイバー、チップタイプ、ミニオイルフェンスをそろえている。村上商事の実験では、従来の化学繊維系油吸着材に比べ、油の吸着速度、保持率（閉じ込めておける油の割合）とも「油吸太郎」が優れていた。

二〇〇八（平成二十）年には、マットタイプの製品が、海上での使用が可能と



原料となる使用済み紙管

なる国土交通省の型式承認を受けた。油吸着力の高さや水に沈まないなど、厳しい条件をクリアしての承認で、「油吸太郎」の性能の高さが認められたのだ。また、紙管すなわち古紙の再生品であることから、グリーンマークと山口県サイクル製品の認定も受けている。その後地元製油所とつながり、石油精製過程で生じる油吸着力に優れたニードルコックスを吸着材に配合して性能を向上。さらには、家庭用油吸着マットも商品化し、製品の充実を図った。一方、販路拡大に向けては、化学繊維系油吸着材に比べて価格が高いことが一つの課題になっている。だが、一度使用したユーザーのリピート率は高く、固定客は着実に増加している。村上社長は、「天然素材なので、使用後はバイオマス燃料にすることも可能。環境循環型製品としてもアピールしたい」と、拡販への意欲を見せている。

食生活の変化を敏感に感じ取り、 多彩な商品を展開するますやみそ

《広島県呉市》

商品開発は常に基礎の上に成り立つことを基本にし、新機軸と伝統を両立させるますやみそ。時代の変化に柔軟に対応しながら、食の未来を切り開いている。

「伝統の力と五代目」

ますやみそは一九二九（昭和四）年、米と麴を中心に販売する舂本商店として創業した。その頃、味噌はまだ各家庭でつくられていたが、やがて家庭で味噌がつくられなくなると、麴の需要は自然と減り、製品化された味噌の販売が求められるようになった。それに合わせて舂本商店は「ますやみそ」へと衣替えをしたのである。

現在の社長は創業から五代目、一九六五（昭和四十）年に株式会社となつてから四代目の舂本知己氏、現在三十七歳の若さだ。アメリカの大学でMBAを取得した国際派だが、意外にも、その口から最初に出てきたのは「礼節」という言葉だった。「当社の基本精神は初代から続く『礼節』です。お客さまを敬い、食べていただく方まで含めて礼節をもって接するということなのです」と舂本社長は語る。

食生活の変化を見抜き 多品種を展開する

味噌や麴以外にも、家庭の食卓に並ぶますやみその商品は多い。

その一つが「日本と世界の鍋シリーズ」。このシリーズの発端となった「かきの土手鍋の素」は、まだ専門店ではか本格的な鍋料理が食べられなかった三十年前に、家庭でも鍋が食べられるようにと開発したものだ。販売当初はなかなか消費者の理解を得られず、返品されることもあったというが、現在では他の企業も同様の商品を売り出すほどになった。そのほかに「キムチ鍋の素」「みぞれ鍋の素」「魚貝でバイバエスの素」など、国内外の鍋料理が家庭で食べられるように、多彩な商品が展開されている。

今では当たり前となった「鍋の素」の定着を早くから見抜いていたのは、時代を読み取る力が備わっていたからだろう。核家族化に伴い個食化が進むといった、時代の変化を読み取れば、自然と新しい商品が見えてくるという。

他方、食事の多様化によって、食生活と味噌のかかわりは変化している。ご飯と味噌汁が定番だった家庭の朝食に、パンとコーヒーが加わって久しい。そのことから、味噌の存在感は薄

新しい取り組みを次々と展開しているますやみそだが、原点にある「礼節」を重んじる精神は変わらないのであった。

まねのできない技術で 味噌や麴をもっと浸透させたい

ますやみそは「母さんの味」として地元で深く浸透しているが、長年愛されている定番商品だけでなく、「広島県の「ものづくり」＆オンリーワン・ナンバーワン企業」でオンリーワン技術として紹介された「四季の蔵」など、老舗ならではの技術力を生かしたさまざまな商品を製造・販売している。「四季の蔵」はそのユニークな熟成方法で知られる。発酵過程で味噌にクラシック音楽を聴かせることで、発酵微生物の活性化を促し、熟成が進んでおいしくなることを利用したものだ。ヴィヴァルディの「四季」が流れる熟成蔵は独特の雰囲気といえる。

まりつつあるように思えるが、そうではないという。サバの味噌煮など味噌を使った家庭料理を外食で食べる機会は増えており、「日本人が味噌を嫌いになったわけではなく、食事のスタイルが変わっただけ」と舂本社長は分析する。

現在も、家庭で日常的に利用する味噌や麴食品は、安くて高品質のものが求められており、「それを提供するの自分たちの使命」と述べる。食生活が変化するなかで、消費者が求めるニーズを敏感に感じ取り、新しい商品を開発する一方で、日本の生活に根付いた定番商品の価値をしっかり見定める。人々に愛される商品を長年つくってきたますやみその柔軟な姿勢がうかがえる。

最近では、イギリスやシンガポールなどを中心に海外にも進出。野菜につけるディップなど現地の食文化に合わせた商品を開発し販売している。

熟練のスベシヤリストと 若手の融合を図る

舂本社長は、「自分は昔人間かもしれない」と語る。だが、若手の人材の育成に手をこまねいているわけではない。所長などの幹部に若手も登用し、企画や販促部門などでは、若手チーム

ほかに、有機JAS認定の味噌「見返り美人」や無添加の「芳醇合わせ味噌」など、その質の高さが評価され、モンドセレクション最高金賞および金賞を受賞した商品も存在する。製造技術だけでなく、素材にもこだわっている点も特徴の一つ。商品の中

には、呉の特産「海人の藻塩あまひしもしお」が使用されているものもある。おにぎりにかけるだけで違いがわかるといわれる逸品だ。さらに最近では、大長レモンを使用した「くれモン ペッパーソース」なども販売し、地域に根付いた企業として、地元の特産品とのコラボレーションに力を入れている。

そして、創業時からの商品である麴は今も健在で、近年の塩麴ブームで大きく売り上げを伸ばした。ますやみそはもともと麴づくりから出発しており、その技術は絶えず引き継がれてきた。「麴づくりはどこにも負けない」と舂本社長は自信をのぞかせる。



の新しい視点を生かし、事業を展開させている。しかし若い故、適切な判断や礼節が足りないこともある。「まだ若い自分に対しても言えることで

す」と舂本社長は自らを律する。会社の運営には社内の先輩であるスベシヤリストたちの力がまだまだ必要なのだ。

味噌や麴は生きた商品であるため、わずかな違いから味の変化が生じる。現場ではその困難な課題を常に抱えており、そういう場面では、熟練者の経験が絶対に必要なのだと強調する。革新と伝統。若手の新しい視点と熟練者の知恵。ますやみそは新旧の力を両輪として、前へ進んでいるように見えた。



味噌や麴を使った人気商品



呉市特産の大長レモンと海人の藻塩を使った新開発調味料

「定年後は田舎暮らし」の夢が 地域資源の再生に変わった古野俊彦さん

田舎暮らしの夢が桜江町につながり、桑の再生、桑茶開発へと育っていった。旅行代理店での経験を生かし、六次産業化で地域活性化に貢献している。



profile

古野 俊彦 (ふるの としひこ)

1944年福岡県福岡市生まれ。大学卒業後、旅行業に従事し、ベンチャー企業数社を立ち上げる。96年に島根県江津市桜江町へ1ターンの生活が、2000年に現在の有限会社桜江町桑茶生産組合を創立、関連会社2社とともに代表を務める。

文・平光 稔 (広島市在住) 写真・古川 誠 (島根県出雲市在住)

養蚕の里を健康茶で再生

山間の風景が美しい江津市桜江町は、島根県のほぼ中央に位置している。中国山地と江の川が育む豊かな自然に囲まれ、桜江町桑茶生産組合の建物はたたずむ。現地へ立つと、焙煎される茶葉の香りに鼻をくすぐられ、茶の生産が地域に根ざしていることを実感させられる。

同地では有機農法による桑畑が広がり、健康茶として評価の高い桑茶をはじめ、青汁、成分を粒に加工したサプリメント、美容茶や菓子類など、時代と市場の需要に合わせて開発された多くの製品が、いきいきと育つ桑から生み出されている。その仕掛け人となり、



桜江町の桑園 写真提供:有限会社桜江町桑茶生産組合

桑を生かした地域産業の再生に取り組んだのが、組合の代表を務める古野俊彦さん(68歳)だ。

もともと桜江町は養蚕業で栄え、農家は蚕が餌とする桑を兼業で栽培していたという。昭和四十年頃は米作と同程度の収入を農家にもたらし、基幹産業の半分を養蚕業が支えていた。しかし繊維業界の低迷に伴い養蚕業も衰退、古野さんが桜江町を訪れた当時、生い茂る桑の木は地域にとつて負の遺産にすぎなかった。古野さんが偶然に桜江町、そして桑と巡り会い、紡ぎ始められた再生の物語には、古野さん自身の夢が重なっていく。

江の川に見た「ふるさと」の原風景

古野さんと桜江町の出会いは、趣味のラン栽培だった。インターネットで栽培用の立派なハウスがあると知り、見学に来た古野さんは、故郷の福岡県を流れる筑後川と、桜江町で目にした江の川に同じ懐かしさを感じ、愛着を持ったという。「筑後川は筑紫次郎、江の川は中国太郎。愛称も良い巡り合わせだと思いましたが」と古野さん。定年後は夫婦で都会を離れ、田舎暮らしをすることを夢見ていたが、予定よりも早く実現

する。移住を決心し、縁もゆかりもない土地での1ターンの生活が、一九九六(平成八)年に始まった。当時五十一歳だった古野さんは、仕事が少ない桜江町に定住するには、前職だった旅行代理店での経験を生かし、地域の特産品開発ができればいいと思っていた。ちょうどその頃、桜江町の遊休地を再利用する活動に対して、外から移って来た古野さんへ意見が求められる機会があり、桑畑の存在を初めて知る。

「町の人は放置と言いますが、立派な桑が育っているんですよ。江の川が肥沃な土地を地域にもたらし、質の高い桑を収穫できる環境になっていました。これはもったいないと第三者の視点で感じたことが、桑を再生するきっかけになりました」

誰も相手にしない桑畑とはいえ、荒れていくのは忍びないと思う地元の人も多かったという。古野さんは恵まれた地の利に育つ、桑の特産化に取り組むことを決めた。

「なぜ桜江町、そして桑なのか。それは、背景や歴史がないものではなく真似され、ブームで終わってしまうから。地域の人も桑で栄えた時代を知っているから、桑がなくなるのは寂しいはずだ。桑を再生することは、人を再生

することであり、新しい人生に挑戦する自身の再生でした」と古野さんは振り返る。

健康を切り口に試行錯誤

桑を特産化すると決めた古野さんは、「桑の葉に内臓脂肪を抑制する効果がある」と専門家が実験結果を報告した事例を知った。内臓脂肪は生活習慣病の要因の一つとされており、それに効くお茶なら毎日摂取する習慣にもなる。古野さんが遊休農園という「宝の山」と健康食品の「桑茶」を結び付けるのに時間は要しなかった。

「当時は桑の栽培はもちろん、製茶に関しても未経験。全くの手探り状態からのスタートでした。町の人も半信半疑です。それでも私たち夫婦が畑で作業をしていると、ぎこちない作業を見かねて協力してくれました。地元の人も桑へ対する思い入れは失っていませんでした。だから助けってくれたのでしよう」と懐かしむ。

古野さんは図書館やインターネットを利用して緑茶や紅茶の製法を独学で探った。桑の葉を乾燥するためにシイタケ栽培用の乾燥機を利用し、自宅ではガスコンロで桑の葉を焙煎しながら試作を繰り返した。そして最初に出来上がった加工品が「マルベリーハープのお

茶」。市販の化粧箱に手作りのラベルを貼ったものだからか、JAや市場は無関心だった。その後は自分たちで県内外のイベントに出かけ、来場者に試飲してもらおう日々が続く。

「次第に、おいしい、どこで買えるのかと反応が返るようになりました。これはいけると手応えを感じましたね」と古野さん。しかし、今の手作りのままでは発展がない。次に古野さんが模索したのは、桑茶の量産・流通体制の確立だった。

生産・加工・販売の六次産業化へ

手探りの市場開拓だったが、有志二十一人で立ち上げた任意組合のもと、一九九八（平成十）年一月、大阪で開かれた大手流通会社のバイヤー会議

に出品した。興味を示され試験販売の契約を締結し、量産体制整備の大きな足掛かりとなった。同年三月には桜江町桑茶生産組合を発足させ、六月には四百箱を初出荷した。桑の葉と細かい枝を分離させる工程には、使われていなかったコンクリートミキサーを利用。その発想に、製茶機械メーカーの担当者も驚いたという。

資源再生で安定した地域雇用に貢献

二〇〇〇（平成十二）年に農業生産法人の認可を得てからは、積極的な製品開発が続く。二〇〇二（平成十四）年には桑園で全国初の有機JAS認証を取得、安全性の高い生産体制が実証された。桑茶だけでなくハト麦の栽培も始め、桑の葉が収穫できない季節でも生産の安定化を図っている。それと同時に粉末茶やサプリメント、ジャムなど、消費期限の長い商品開発も進めており、季節による需要の変動に影響されない雇用確保にもつながっている。



桑の葉を焙煎

「生産だけでは農業の発展はない。自分たちが直接加工して販売・流通までの道筋を整える六次産業化が急務

と考えていました。そのため全国各地のイベントで出品を続け、電源地域振興センター主催の「電気ふるさとじまん市」などにも参加し、大手百貨店を含めた販路も同時に拡大させていきました。最初から安売りだけを求める販売店とは提携せず、桜江町の桑茶が持つステータスも大切にしました。そして通信販売による直販も開始。相手先ブランドの生産品にも原料として桑葉を供給するなど、農業生産法人の事業として多角的な発展を目指しています」

二〇〇五（平成十七）年度、「遊休資源『桑』を生かした農業の六次産業化」により、古野さんらの取り組みは、農林水産省が選定した「立ち上がる農山漁村サミット」の事例にも選ばれる。桑との出会いから九年、見事



桑茶のほかにサプリメントやお菓子も販売

に大きな花を咲かせ実を結んだ。グループ全体の売上は二〇一一年（平成二十三年）年度に五億円を超えた。「外からの移住者として実感した課題は、地域に雇用環境が整っていないこと。組合の発足は農業による雇用貢献を実現できたことに価値があった。関連二社を加え五十人以上を雇用していますが、社員の三割は二十代から三十代。今後は大学生のインターンも受け入れ、若者の就業にも取り組んでいきます」と古野さん。

桑という地域資源の再生は、多くの地域貢献をもたらした。組合の社屋は元繊維会社、関連会社は廃校した小学校の建物を再利用している。そして何より自分の役割も再生できたと語る古野さんは、これからも地域資源と人材の発掘に夢を紡ぐ。



繊維会社の建物を再利用した社屋

平光 稔（ひらみつゆたか）

1960年広島県生まれ。広告・販売促進の企画制作業を営む傍ら、よつば編集広告事務所設立にも参加。自治体の広報や企業の情報媒体などに、中国地域を中心とした取材記事を幅広く執筆している。

「当地

B

級グルメ

9

防府みそ焼きマイマイ

《山口県防府市》

その名もおちゃめな「防府みそ焼きマイマイ」は一見、こってりした口当たりを予感させる褐色の焼きうどん。だが、口に運ぶとあっさりした風味と懐かしい味わいで、思わず箸が進む。ソースともしょうゆとも違う味付けの正体は、麦みそのもろみ。具材の主役・ギョロツケ（魚のすり身揚げ）との相性も抜群だ。

防府市は山口県の瀬戸内海側中央に位置し、かつて周防国の国府が置かれた歴史あるまち。市内には日本三天神の一つである防府天満宮や周防国分寺、毛利氏庭園などが点在している。

そのような歴史・観光資源に加え、「グルメで地域活性化を」という機運が防府商工会議所を中心に高まり、商店街、食品製造業者、飲食店なども巻き込んで二〇一一年（平成二十三年）一月に「ほうふB級グルメ開発会議」を結成。共同で作りに上げたのがこの「防府みそ焼きマイマイ」である。

味の特徴は、防府産麦みそのもろみを絡めた焼きうどんに、防府産ギョロツケをトッピングすること。防府一帯では昔からみそ汁などに麦みそがよく使われてきたため、そのもろみをソース代わりに使うことを思いついた。魚のすり身を揚げたギョロツケも、海産物に恵まれ、魚の練り物工場が多い防府ではおなじみの食材だ。地元で愛されてきた二つの味を生かし、老若男女に食べやすい新たな味に仕上げた「防府みそ焼きマイマイ」は、いわば素材発掘型のB級グルメといえよう。

ネーミングは防府市出身の芥川賞作家・高樹のぶ子さんの自伝小説をアニメーション映画化した『マイマイ新子と千年の魔法』にちなんで決定。マイマイは映画の中では「つむじ」の意で使われており、うどんともろみそをつむじのように混ぜることから、そのように命名した。

二〇一一年九月に山口県主催の山口の美食グランプリ大会で優勝後は注目度も高まり、イベント等でも人気上昇。現在、市内の飲食店十店で味わえる。学校の給食や調理実習にも採用され、地域の食文化として歩み始めた。人と人とのマイマイをも担う一品に成長している。

（文・村上郁子・山口県岩国市在住）





藩ものがたり 12 鹿野藩

〔鳥取市〕

海外雄飛を望んだ鹿野城主亀井茲矩。鹿野藩は、琉球進出を夢見、朱印船貿易にも並々ならぬ意欲を見せた戦国の雄が育てた藩である。大きな野望だけでなく、民政にも力を注いだ跡が今も各所に残されている。



春の鹿野城跡 写真提供:杉野昭久(鳥取市在住)

海外雄飛を望んだ 亀井茲矩

関ヶ原の戦いでは因幡・伯耆(因伯)両国において宮部、木下、垣屋、南条など、西軍に味方した武将が多かったため、そのほとんどは領地を没収された。それに代わったのは因伯で唯一東軍に参加した鹿野城主亀井茲矩である。茲矩は、この功績で二万四千二百石を増加されて三万八千石となった。

鹿野城はもともと毛利氏の因幡進出の拠点である。茲矩は秀吉の鳥取城攻めの際、城主に任ぜられて湖山池周辺の開発、大井手用水の開削、朱印船貿易などの多くの治績を挙げた。

茲矩は本能寺の変に駆け付けた際、秀吉から所望の土地を聞かれると「琉球」と答えたと伝えられている。当時は海外との貿易が行われ始めていた時代であり、茲矩も沖繩への雄飛を望んでいたであろう。秀吉はそれに応えて茲矩に「亀井琉球守」と記した金扇を与えた。

ているが、実際には朝鮮への侵攻を図っていた秀吉は兵力の二分を恐れてそれを許さなかった。

茲矩はこの後も慶長十二(一六〇七)年、十四年、十五年の三度にわたってシヤム(現タイ国)へ渡航許可の朱印状を得て南蛮貿易を行っている。輸出品は刀、金銀細工物、京染小袖など、輸入品は羅紗、綾曇子(綾緞子)、狸々皮などであったが、徳川幕府は慶長十四(一六〇九)年に諸大名が大船を所有することを禁止し、貿易活動を制約する政策を取り、同十六(一六二二)年で鹿野藩の朱印船貿易は廃止となった。朱印船貿易そのものも寛永十二(一六三五)年の第三次鎖国令により終焉を迎えた。

民政にも心を配った茲矩

茲矩はまた、治政面でも優れた手腕を発揮した。干拓や用水路などの工事を積極的に行ったが、天正十六(一五八八)年の日光池の干拓はその代表的なものとしてされている。この工事の起工に当格が強かったようである。鳥取東館新田藩などと呼ばれることもあるが、藩としての実態はほとんどなきに等しいものだった。

池田家時代のエピソードは、東館二代仲央が家の医師であった箕浦文蔵を儒者として抜擢し、その後文蔵が本藩に迎えられて藩校「尚徳館」の創建に尽力したこと、幕末の動乱期に藩主となった仲建が、鳥取藩主の池田慶徳と京都出兵をめぐって対立し、諫死していることと程度である。

現在は鳥取市となっている鹿野には、城下町の風情を残す町屋や城跡公園などがある。昭和四十一(一九六六)年には国民保養温泉地に指定され、温泉が保養・医療・福祉施設などで利用されるなど、近代的な発展を見せている。



亀井茲矩の菩提寺讓傳寺 写真提供:杉野昭久(鳥取市在住)



監修・鹿野町郷土文化研究会

鹿野城の改築

茲矩が根拠とした鹿野城は鳥取市鹿野町の城山(妙見山一五〇・三m)の山頂部にあった本丸・二の丸を中心とした山城であった。関ヶ原の戦い後には所領も約三倍になり、家臣も増えたため城を増築する必要に迫られ、城の改築が行われた。

改築された鹿野城は、昔からの山頂部分は天守曲輪を中心にして二重の総石垣造りに改められ、天守は三重だったと伝えられている。また城山神社の一段下(西の丸)といわれる所に、八間×七間半(約二〇〇m)の本瓦葺書院造と考えられる建物の礎石配置があるが、



鹿野城下町地区のまちづくりの拠点鹿野ゆめ本陣 写真提供:いんしゅう鹿野まちづくり協議会

美祢線

《山口県山陽小野田市・美祢市・長門市》

山口県を南北に走るJR美祢線。山陽から山陰方面へ一直線に貫く貴重な幹線としての役割に加え、通勤・通学の路線として、寝太郎堰、秋吉台、長門湯本温泉などの風光明媚な観光地への交通手段として活躍している。



春の野を行く美祢線 写真提供:JR美祢線利用促進協議会

軍需目的で敷設された大嶺線

山口県山陽小野田市の厚狭駅から長門市駅に至る全長四十六キロメートルのJR美祢線。全線単線で非電化、山間をトコトコとのんびり走る。窓の外に目を向ければ、両側の木々の枝や草木が取れそうなほど、豊かな自然が広がる。ミニチュアのようなトンネルや橋を渡るたびにポーツと警笛が鳴り、まるで鉄道模型に乗車しているようなノスタルジーを感じる。

しかしながら、のどかな路線になったのは現代のこと。美祢線はそもそも軍需目的で敷設されたものだった。一九〇四（明治三十七）年の日露戦争開戦により、軍艦の燃料として大嶺炭田の無煙炭（煙が出にくい良質の石炭）を徳山の海軍燃料廠に輸送する必要があることから、海軍省は、厚狭駅〜大嶺駅間一九・七キロメートルの大嶺線

をわずか一年余りの突貫工事で翌一九〇五（明治三十八）年に開業した。その後、延長工事が行われ、厚狭駅〜正明市駅（現長門市駅）を「美祢線」、南大嶺駅〜大嶺駅間を「大嶺線」と称するようになった。

石炭ブームで一九六三（昭和三十八）年度の大嶺駅の貨物取扱量は全国でも五位以内に入るほどだったが、一九七二（昭和四十七）年にすべての炭鉱が閉山すると、貨物の輸送量が激減し、一九九七（平成九）年には大嶺線が廃止された。このことにより美祢線の旅客・貨物量も激減していったのである。

二〇一〇年の豪雨災害とJR美祢線利用促進協議会の設立

輸送量減少に伴い、急行列車や臨時快速列車、貨物列車の運行が廃止された美祢線に追い打ちをかけたのが、二〇一〇（平成二十二）年七月の豪雨災害

ばならない」といった使命感があった。なぜなら、美祢線がなくなれば、通学している学生や子ども、マイカーを持たないお年寄りの生活路線を奪うことになるからだ。美祢線を守り、美祢線を次の代につなぐことが自分たちの役割だという切実な思いがあったのである。

マイルレール運動とラッピング列車

美祢線沿線には、歴史的灌漑用水「寝太郎堰」、日本最大のカルスト台地「秋吉台」、「長門湯本温泉」など多くの観光地がある。美祢線車内にある「美祢線利用証明書」を持参すると沿線公共施設の利用料金が割引になる。今年四月からは、三市の特徴をモチーフにした三両のラッピング列車が運行予定で、春の観光をさらに盛り上げてくれるだろう。このように、さまざまなかような観光地にアクセスで

きる美祢線のイメージアップ作戦が進行中だが、実は促進協議会では「マイルレール運動」と称して、日常生活路線としての利用促進に最も力を入れている。例えば、沿線の市役所職員は美祢線を通勤や出張に積極的に利用するよう心がけている。こうした試みは、美祢線乗車率の向上につながるとともに、マイカー利用を控えることで地域の環境保全にも貢献している。

運行本数があまり多くない美祢線。現代の感覚では、確かに通勤・通学の路線として不便な部分もあるが、それ以上に地球に優しく、利用者の心を和ませてくれる。地域の願いを乗せて今日も走り続けている。
(文・藤沢享乃・広島市在住)



作図: 小学館クリエイティブ



恋人の聖地長門湯本温泉に流れる音信川に恋短冊を流す 写真提供:長門市



厚狭川沿いには150本の桜が咲き乱れる 写真提供:美祢市



日本最大級のカルスト台地秋吉台 写真提供:美祢市



山口県の民話「寝太郎物語」になぞらえられる寝太郎堰 写真提供:山陽小野田市

不動院金堂

《広島市》



力強い印象を与える不動院金堂外観 写真提供:不動院



金堂内部の構造

不動院は戦国時代に中国地方で一大勢力を示した大内義隆が、山口に建てたものを後に安国寺恵瓊がこの地に移建したと伝えられる。国宝に指定された金堂は、桁行三間、梁間四間、一重裳階付、入母屋造、柿葺きの建造物。正面一間通りを吹き放しとした珍しい構造を持ち、現存する唐様の建築としては最大級であり、内部の空間構成は中世の本格的な仏殿の様式を思わせるものとなっている。現在のはつきりとは見えなくなっているが、天井には天女と龍の絵が描かれ、「天文九年……」（一五四〇）の賛が添えられている。それにより創建もこの頃と思われる。

原爆の爆心地から約三・九キロメートルの距離にあり、一部被害を受けたものの倒壊は免れた。現在金堂は修復中であり、外周は工事囲いに覆われている。二〇一三年八月末に覆いが外され、二〇一四年三月に工事完了の予定である。



◎「碧い風」VOL.77 2013年3月1日発行

発行人・神田 尚 編集人・城市 奈那
●企画・発行・中国電力株式会社 エネルギア総合研究所(広島オフィス)
〒730-8701 広島市中区小町4-33 ☎050(8202)3824
[ホームページアドレス]http://www.energia.co.jp/

●編集・制作・株式会社ジェイクリエイト
〒101-0051 千代田区神田神保町2-14 朝日神保町プラザ204
☎03(5212)3981

ISSN 0918-9335

禁・無断転載

平成4年の創刊から20年間、編集人として本誌の発行にご尽力いただいた城市創氏が昨年10月逝去されました。

城市創氏は、本誌をライフワークとし、中国地域の魅力ある人物や資源をタイムリーに情報発信することで、中国地域各地の地域づくりに示唆を与えるとともに、読者の地域への関心を向上させるなど地域の活性化に貢献されました。故人のこれまでの功績に深く敬意を表するとともに心よりご冥福をお祈り申し上げます。

故人の遺志を受け継ぎ、引き続き、皆さまに愛される誌面づくりに努めますので、今後ともご愛読のほどよろしくお願ひ申し上げます。

発行人 神田 尚